

## マギル疼痛質問票日本語版における痛み表現に関する研究 ―感覚的表現を中心に― 華迪聖

本稿は中村（1986）『痛みへの挑戦』、佐藤（1988）「McGill Pain Questionnaire 日本語版の検討」（『第 52 回日本心理学会大会発表論文集』）、熊澤（1999）『標準痛みの用語集』の三つのマギル疼痛質問票日本語版の感覚的表現（計 126 個）を取り上げて照らし合わせながら、言語学の立場より痛み表現の方法と特徴及び各日本語版に見られる翻訳上の問題点について考察してみた。その結果は以下の通りである。

痛み表現の方法と特徴について：①痛みの感覚は共有不可能の特性を有するため、「ような」の比喩指標が積極的に用いた直喩表現やオノマトペを利用して抽象的感觉を具現化する効果が見られた。②表現の構造と品詞性を分析すると、動詞の使用が多く見られる。よって、痛みという感覚は動的に捉えられることがわかった。③比喩表現に含まれる単純動詞・複合動詞やオノマトペの音象徴（清音、濁音、促音、長音、撥音）を利用し、痛みの程度上の差異を表す表現法が観察された。翻訳上の問題点について：①中村翻訳版の中では「気にさわる」「不快な」「気になる」「激しい」等のような不明瞭な表現が続出する。②誤訳に関しては、原文の boring（〈穴を〉あける）、lancinating（刺す、突き通す）に対して中村翻訳版ではそれぞれ「削るような」、「引き裂くような」に翻訳されている。原文の垂直的運動が中村翻訳版の水平的運動に本質的に変わってきた。また、taut（〈筋肉・神経が〉緊張した、張る）に対して佐藤翻訳版では「はてるような（陽焼けした時のような）」に翻訳されており、完全に誤訳と判断できる。さらに、感覚的表現の rasping（搔く、擦る）に対して中村翻訳版と熊澤翻訳版では「いらいらする」という情動的表現に翻訳されている。その他、訳者によって受動文（中村、佐藤）か能動文（熊澤）の使用上の相違も見られた。三種類の日本語訳版の各表現の重複率を見れば、中村翻訳版と佐藤翻訳版は独自に作成されたものであるが、熊澤翻訳版は中村翻訳版と佐藤翻訳版を参考に作成されたことも窺えた。